

ダニエル・デフォー

『ペストの記憶』(11)

訳 武田将明
Takeda Masaaki

その教会墓地を見張る墓掘りの男と知り合いだったので、ぼくは中に入るのを認められた。男は門前払いをすることは少しもなかったけれど、入らない方がいいと熱心に説得してくれた。とても真剣に、彼はこう語った(善良で信仰心が篤く、良識もある男なのだ)。「こうして怯^{ひる}まずにどんな危険なこともやってるのは、それが俺たちの仕事で、やるべきことだからです。穴のなかじゃみんな、きっとどうかお護りくださいと祈ってますよ。ところがあなたは好奇心に駆られたというだけで、ここに来るハッキリした動機はほかにないようだ。まさかあなたは、好奇心だけでこんな危険に踏みこむことが許される、なんて言い張るつもりじゃないでしょう」ぼくは彼に言った。「わたしは心のなかで駆り立てられているんだ。それにあれを見れば教わることがありそうだし、役に立たないことはないはずだよ」「なんだ」と男は言う。「そういうわけでここまで来たのなら、神の許しのもとお入りなさい。間違いなく、あれ

は説教になるでしょう。ひょっとすると、あなたの人生で一番ありがたい話になるかもしれません。あれは見る者に語りかけてきます。まさに声が聞こえてくるんです。力強い声が。俺たちみんな悔い改めちまうようなのがね。」続けて彼は扉を開けて言った。「入りなさい、あなたが望むなら。」

彼の言葉でぼくの決意は少しぐらつき、揺れ惑ううちにかかなりの時間が過ぎた。しかしちょうどこの間、ミノリーズ通り¹の端からこっちに来る二本の松明が見え、触れ役が鐘を鳴らすのが聞こえた。すると死の車と呼ばれる馬車が、街路を駆け抜けながら飛び出してきて、もうぼくはあれを見たいという欲望に抗えなくなり、なかに入った。最初、墓地には誰もいないように思われた。入っていく人も、埋葬人たちと馬車を駆る御者(実際は馬と車を前から引いていたけれど)しかいなかった。ところがみんな穴まで来ると、一人の男がうろうろしているのが見えた。茶色のマントに身を包み、その下でしきりに手を動かして、ひどく苦しんでいるようだ。埋葬人たちが直ちに男の周りに集まった。さっきお話しした、自分を葬りたいと切望する、気の毒にも正気を失った、というより望みを失った人ではないかと思ったからだ。男はなにも言わずに歩きまわっていたけれど、ただ二、三度、とても深く、大きなうなり声を発し、胸の張り裂けそうなため息を吐いた。

埋葬人たちが男のそばに行ってみると、いま推測したような、病に感染して絶望に駆られた人でもなければ、精神を触まれた人でもなかった。実は妻と何人もの子供を一度にあの車に

¹ オールドゲート門とロンドン塔を結ぶ通りの名。本書の語り手 H.F. の住むホワイトチャペル通りの近くにある。

連れ去られたせいで、ひどく重苦しい、悲痛な思いに打ちひしがれた人物だった。車は先ほどこの男と一緒に墓地に入っていた。心痛と耐えがたい悲しみに駆られて、彼はここまでついて来たんだ。彼が心底嘆いていることは見れば明らかだったけれど、悲しみ方は男らしく、涙が止めどなくあふれ出すことはなかった。おだやかに「一人にしてください」と埋葬人たちに頼み、「家族の亡骸が投げこまれるのさえ見られたら帰ります」と言った。それを聞いた人びとは、しつこく注意するのをやめた。ところが車が反転し、亡骸が無差別に穴にぶちまけられるのを見たとき、彼は愕然とした。せめて丁重に置いてもらえると、想像していたんだ。そうするのは無理だと後で説得されていたけれど。それで、その光景を見たとき、男はもう抑えられなくなり、大声で叫んだ。何を言ったのかは聴き取れなかったけれど、彼は二、三步後ずさりし、気絶して倒れこんでしまった。埋葬人たちが駆け寄ってその身を起こしたところ、少し経って男の意識が戻り、人びとは彼をパイ亭²という、ハウズディッチ通りの端を渡ったところにある店まで連れていった。男はその店の得意客だったみたいで、ちゃんと介抱してもらえた。帰り道で男はもう一度穴を覗きこんだけれど、すでに埋葬人があつという間に土をまき散らし、遺体を隠してしまっていた。そのせいで、蠟燭の点いた角灯が穴の周囲にいくつも置かれ、いずれも土を山盛りにした場所で七つか八つ、いやた

² 前回登場した「三修道女」亭と同様、このパイ亭も実在する居酒屋兼宿屋だった。やはり規模の大きい店で、馬車の馬を替えることもできた。オールドゲートのセント・ボトルフ教会から進んだ場合、通りを斜めに渡ったところにあった。(Bakscheider 55)

ぶんもっと多く光っていたのだから、灯りは十分あったにもかかわらず、なんにも見えはしなかった。

これは本当に痛ましい情景で、他のどんな出来事にも劣らないほど、ぼくの心をつかんだ。だけど次に見たのは、ゾッとする、恐怖に満ちた光景だった。馬車に十六か十七の亡骸が収められ、リンネルのシーツや、ベッドの上掛けにくるまれているものもあれば、裸も同様のものもあった。また布が緩んでいると、穴にぶちまけられるときに、せつかくの身を覆うものが剥がれてしまい、ほとんど裸の姿で死体の山へと転げ落ちた。だけどこれは死んだ者には大したことじゃないし、まだ死んでない者にもそれほど不謹慎には思えなかった。あの人たちはみんな死んでしまって、言ってみれば人類の共同墓地に押しこめられる運命なんだから。ここではなにも区別はなく、貧しい者も豊かな者も一緒にされた。他に埋葬の方法はなかったし、仮にやろうとしてもできなかった。これほどの大災害で次々と亡くなる莫大な数の人びとに、棺桶の用意さえ間に合わなかったからだ。

埋葬人について、悪いうわさが広まっていた。彼らの許に運びこまれた遺体が、当時の言い方では丁重にくるまれた、つまり頭の上と足の先を縛った埋葬用の布に巻かれたものだったでしょう。³ 事実、時おりそんな遺体があって、たいていは上質のリンネルが使われていた。それでうわさというのが、埋葬人

³ この箇所への **Bakscheider** の注をそのまま訳しておく。「1665年には、粗布、リンネル、毛織物、あるいは帆布で遺体を包みこみ、その上と下をしっかりと縛っていた(のちに遺体はすべて毛織物に包んで埋葬するよう命じられる)。布の内側に花やハーブが巻かれることもあった。」(55)

私たちはとんでもない悪人で、馬車のなかで死者の布を剥ぎとり、丸裸にして地中に埋めるといったものだった。もっとも、ここまで罪深い行為がキリスト教徒のなかで、しかもあのような恐怖に満ちた時代に行われるとは、ぼくにはにわかには信じがたいので、ただ話としてお伝えし、判断は差し控えるしかない。

病人の世話をする看護人の非情な治療態度についても、感染した人たちの死期を早めたとか、数えきれないうわさが流れた。でもこれは後で詳しく話そう。

さっきの光景は本当に衝撃的で、ほとんど打ちのめされてしまったから、胸に大変な痛みを覚え、しかも言葉にならないほど悲痛な考えで頭をいっぱいにして、ぼくはそこを立ち去った。ちょうど教会を出て、道を折れて家へと向かう通りに入ったところで、また別の馬車が、松明と鐘を鳴らす触れ役の後に続いてハロウ小路を出て、ブッチャー街に入ってきた。道の反対側を通るのを見れば、死体がすし詰めになっていて、この馬車もやはり真っ直ぐ教会への道を進んでいた。ぼくはしばし立ち止まったけれど、また戻ってもう一度あの悲惨な光景を見る気分にはなれなかったから真っ直ぐ帰宅した。家では自分がどんな危険に身を投じたかをよく考え、ありがたい気持ちになった。どうやらどこも悪くなさそうだったからだ。実際になんでもなかった。

こうなると、あの不幸で気の毒な男の人の悲痛な姿が頭に戻ってきた。改めてよく考えると、涙をこぼさずにはいられなかった。当の本人より泣いたかもしれない。それでも彼のことは心に重く留まったので、ふたたび街に出てパイ亭に行かなくては、という思いに押し切られ、あの男がどうなったか訊ねようと決めた。

もう時刻は午前一時になっていたけれど、哀れな男の人はまだそこにいた。いや実を言うと、店の人たちは顔なじみの彼を親切にもてなした上に、夜通し引き留めていたんだ。この男自身は健康そのものに見えたといっても、そこから感染する恐れもあったというのに。

この酒場を話に出すと、ぼくは残念な気持ちになる。店の人たちはちゃんと常識も礼儀もわきまえた、思いやりのある方ばかりだった。この時期になっても店を開け、前みたいに誰でも入れる雰囲気ではなかったけれど、商売は続けていた。ところがこの店に入り浸る、あまりにひどい連中がいて、これだけ怖ろしい事態のさなかで毎晩ここに集い、羽目を外して滅茶苦茶に騒ぎまくり、怒鳴り散らしていた。ふつうのときならこんな連中がよくやることだったけれど、それにしてもあまりに遠慮を欠いていたので、店の主人夫婦までもこの連中に対して初めは非常識だと感じ、やがて恐怖さえ覚えたんだ。

連中はハウズディッチ通りに面した部屋に席を取るのが慣^{なら}わしだった。毎晩遅くまで居座っていたから、死の車が別の通りの突き当たりからこちらの通りに入ってくるのを、酒場の窓から見ることもできた。触れ役の鐘が聞こえると、急いでやつらは窓を開け、顔を突き出して車を眺める、そんなことがよくあった。馬車が通り過ぎ、外を歩く人や別の窓から眺めている人が、口々に死者を悼む悲しい声を発すると、それを聞いた連中は遠慮のない罵詈雑言を浴びせたんだ。気の毒な人びとが神に呼びかけて憐れみを求めたりしたら、とくにひどかった。あのころは、ふだん通りを歩いていても神に祈る人が多かったからね。

さっき話した、あの気の毒な男の人が店に運ばれたときの慌

ただしい騒ぎが、どうやらこのご立派な方々の気分障ったようで、初めは怒って、こんなやつ(あの男性をやつらはこう呼んだ)を墓場から俺たちの店に連れてくるとは何事だ、と店の主人に食ってかかった。しかし、「この男の人はご近所の方で、本人は健康なのだが家族に起きた不幸ですっかり落ちこんでいるのです」といった答えが返ってくると、怒りの矛先を変えて妻と子供のために悲しむ男をからかいだした。「あのでかい穴にあんたも飛びこんで、家族ともども天国に行っちまえばよかったのに」と人をバカにした言い方をして、意気地無しめと男をあざ笑い、さらにひどく不謹慎な、いや神を穢すような言葉さえ浴びせた。

ぼくが店に戻ったのは、やつらがこの悪行にふけっているときだった。見てみると、男の人はじっと黙って塞ぎこんでいた。連中から罵られても悲しみは心を離れず、しかもその言葉に深く傷ついたようだった。これを見かねたぼくは、おだやかにやつらを咎めた。どんな連中かはよく分かっていたし、やつらの何人かは知らなくもなかったから。

たちまちやつらはぼくを罵倒する言葉を次々と浴びせてきた。「お前こそいまさら墓場の外でなにやってんだ。ずっと行いの正しい連中が教会の穴にどンドン運ばれてるってのによ。死の車が迎えにこねえように、家でお祈りでも唱えてた方がいいんじゃないかねえか？」などと問い詰めてきたんだ。

こんな言いがかりに取り乱すぼくじゃないけれど、男どもの厚かましさにはあつけに取られてしまった。ともあれぼくは落ち着きはらって、こう言い返した。「あなたたちが、いやこの世の誰だろうと、わたしに不正直者の汚名を着せるのは許しません。とはいえ、この神による恐ろしい裁きのなかで、わたし

より立派な方々がたくさんこの世から消され、墓場に運ばれたことは認めます。ご質問に率直に答えるなら、要するにわたしは偉大な神のお慈悲によって護られているのです。さきほど、身の毛もよだつ罵声を浴びせるなかで、神の名をあなたたちは軽々しく出して穢しました。わたしは信じています。わたしが護られているのには、さまざまな天の思し召しがあるでしょうが、とりわけこんな悲惨なときにあんな態度をとる厚顔無恥なあなたがたを咎めるためだと。なかでもこの正しい男の方、あなたたちの隣人(連中の数名は彼を知っていた)が、神が望まれたこととはいえ、ご家族と引き裂かれた悲しみに打ちひしがれているのを知りながら、それを嘲り笑うとはなんですか。」

(東京大学准教授)